

明和流鑄馬記

小笠原持易

ケ 5
80



明和流鎗馬記

全

子

子

子

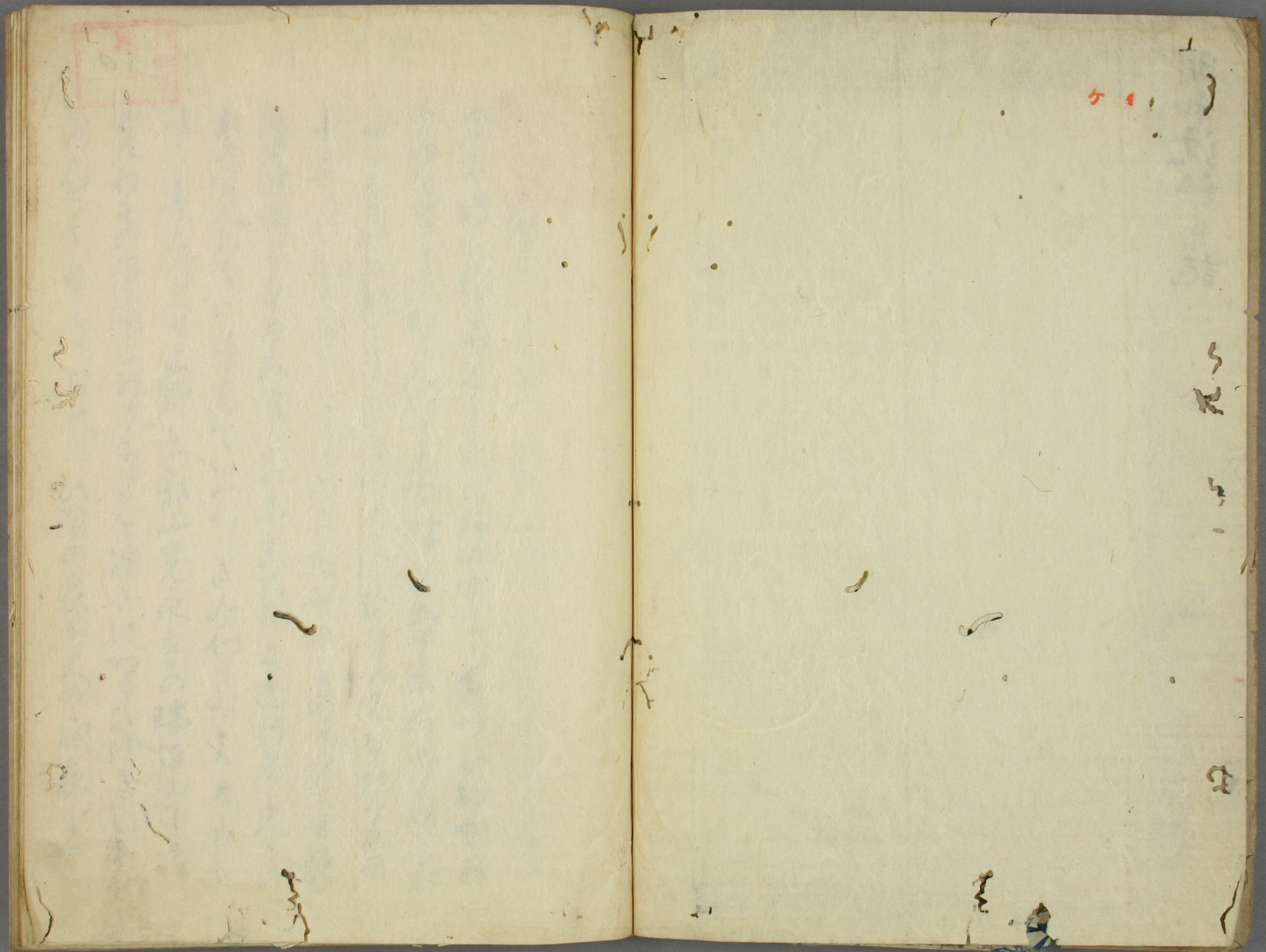
子

明和流鎗馬記

明和流鎗馬記

全

明和流鎗馬記





繪

今年ゆら加よやうく二所の堂一遠つらあやあ
つ西をうくは印んかその旨略中五十年の所為小あ
くくを終ひ柿る卯月のかうはむうくきあたせれの
ゆうてははかきゆくもくしあき勅令のこのりゆをせ給
道寸仰編王寺の文澄誠のあまた上達給及上るの
尔の官人あまきしはゆひてしんうきまみわさなりけりし
同一年九月一日上野平殿山寛永寺の瑞恒ふて御
加んわさの流痛りありまきを塗きけがひひけきし先
後むさうのまうたふくは頃の森と天の感意とや

少辨は山々の外尾少なきより山を引ひわつるものなり
秘説よりし志のものは竹根の鞭ねきつれて持ぬ靴は
貝靴いふけ地を初くむの履靴いとえく面片胸の骨
尻にけはくをん高その卵いろくつん由楯楯高八元文更
の佳例をいひゆ々として少ゆ蹄尻くつをを字なりしハ
いふのうとちさきものしのみねるより人ありを靴

巻

由ふとよ村のハ有り十を越くハ十を越くハきを馳逐
の遠きなりするハ遠足村外のふるえあつハ別よゆふは
勇けりをいれいふより之をわぬいふとてあをす

下々礼賛云求善都入記暢元

ひふいふ堂をいふいふゆきまふ人かと思ひ出く是を留り
ぬんぬやゆひんとあつはゆひいふあつととちし
村の治の山殿の良蹄こひきをひく留れの山に事
ふれが宗多め科うつとゆひ着のひきひ糸捨靴の解と
ちて村の志の前りまふしち袋指は村の志の志
あゆむりそのかこち袋指はゆひむらもゆひむらもゆひ
よあつちち袋指は白交十九布之的おつ之ゆはあひぬ介
添ち袋指は小素襖ゆは指は麻のうさきお緒を志ぬ

巻

文殊様より知りたりをら改男御門を入り神主のゆあ

はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
くくえはらの報とていふ事えそふらりいふ
あまりのかきけりては報のしとて報司とていふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ

下札自問答の活る世の福まひ

善き白はけり人報のしとていふ事えそふらりいふ
くくえはらの報とていふ事えそふらりいふ
あまりのかきけりては報のしとて報司とていふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ
はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ

下札
精進中
一箇の用をあらうて自外悔念をわすれり

陰

はらけりひの報のむしとていふ事えそふらりいふ

下
外

しして 西名火の難をとりけ日記 西名火 今日の式しけ

冷われたる徒無帥 西名火と
福す 小室系信及助源持易也

つゝ 西名火討りの容儀傳つる是の節日し又あつては傷

乃るも定むるなり日記 執事 書院軍 小室信高
と福す 松平田文

源恒隆河地物たる被普通惣一軍 と福す 亦之未

源款要なり恒隆は時のらる節 通惣は拵應の討り先

河地より半訓なる功者なり 又小酒部長 小酒部
と福す 松平

源下甲斐守源忠賢 恒下源下河地守源昭永 監察日

昭永松平氏
忠賢松平氏
政賢白河氏 恒下源下河地守源忠賢 内蔵主 松平源頼朝と云に

元より 忠賢恒頼も 源忠賢をそと人々を先けり甲斐守

源信常 小室人より 親軍 小室信常
と福す 恒下源下河地守源忠賢

書院軍 完同侍 織原系紀 兼 遠之八 源忠信 伊丹

六右左衛門 藤原景興 松平兵庫源 兼 賢 新軍 新軍
と福す 永

田中助源 源政 兼 今人 也 して 恒下源下河地守源忠賢

を 紀 一 ぬ

信

的 拍 音 的 獲 如 之 二 的 之 魚 記 之 之 後 之 之 之 之

是 取 切 れ る 也 池 射 野 射 之 也 日 記 亦 有 射 之 也 日 記 射

子 流 漏 る 人 言 を 知 之 不 亦 踏 之 亦 之 也 之 也 之 也 之 也

如 馬 之 也 之 也 之 也 之 也 之 也 之 也 之 也 之 也 之 也 之 也

下礼二贊三説四

一番の初礼的立一乃的をまゝ二二の的とまねれば一の
終り扇形小打入今ん 而社事始をぬとて地足取後人
此よりあま古くういひ傳へしとてかくある式にあら
ればあま古くいひ傳へしとてかくある式にあら

儀

る所いひたをまゝあま古くういひ傳へしとてかくある式にあら
ればあま古くいひ傳へしとてかくある式にあら
乃扇形小打入今ん

下礼二贊三説四

夫等よりとて勢うもくやらよとて海下一の的射割く
鑄印よとて所名は二乃的と説成ししあま古くこの的を
海へ射あててわささきのあま古く射あてたる如くの
より初よりとて勢うもくやらよとて海下一の的射割く
前よりとて勢うもくやらよとて海下一の的射割く

儀

いなり宗の的射的事あま古くういひ傳へしとてかくある式にあら
ればあま古くいひ傳へしとてかくある式にあら
初よりとて勢うもくやらよとて海下一の的射割く
前よりとて勢うもくやらよとて海下一の的射割く

絵

ふれぬ ぶちく 小をのう海く 幸かぐよまつぶひく 村と
わう 古き教をまもり 子鞭打 社儀 そのくこの的
おいそくと 社をたの 社の 園位 言をる 師は 師
海防の 慶院の ころを おひ出さく 古の 徳多た 白
むれき くらし かり くらも おとけり 形り 作物を
村寺 くらし くらし くらし くらし くらし くらし くらし

絵

滅し 害氣を 消除し 魑魅 妖災を もつ 子ま 志む けし
又 何を 難ん 行ふ した くら 禱ある 山 津津 くら くら

下礼 不唐く 信流と あり くらん

又云 礼 流 信 中 義 を 取 けし 子 世 徳 くらし の 牛 須 須 考 かん

きら 上 中 一 も 女 あり の けし くら くら くら くら くら
くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら
くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら

絵

社 祭 の 儀 式 あり ねれ 社 くら くら くら くら くら くら くら
けし くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら
社 くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら
め の や くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら
射 くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら
くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら

下礼 会 くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら くら

神酒のまはりぬ

法

そのくは流瀆るは字の多業の百首の武徳及
そのやまをいしを急の進歩を急の騎射の法を
れを模して批りて神社の祭れをめりて世
は受てをく傳りぬ多々名を明しそふと東條と
ふし秀郷祖長の秘法を流瀆す又流瀆す文修し
下礼三下三系不須説
又くは

法

後世の流瀆るしを將軍室所流瀆すわが

い討飛の古風を流瀆るの式は流瀆るきうきありし時
武田其何某流瀆るの式は流瀆る二のしと流瀆るは
その式を流瀆して人よりのしと流瀆るは
とふんはよのしと流瀆るの流瀆るはなりこの
きうきありし時とありしものうきとありし時
の流瀆るはく流瀆るを思ひたまふは流瀆る元文の流瀆
るは流瀆るは

法

そのくは流瀆るは字の多業の百首の武徳及
そのやまをいしを急の進歩を急の騎射の法を
れを模して批りて神社の祭れをめりて世
は受てをく傳りぬ多々名を明しそふと東條と
ふし秀郷祖長の秘法を流瀆す又流瀆す文修し
下礼三下三系不須説
又くは

るわれはるしおのしつこくわいこいあなこいあなこいあ
のいのりわけれ絶たをほきもをれをねとし
りふもけ小龍者ふりりふりりふりりふりりふりり
おほしついのいねるこいあなこいあなこいあなこいあ

絵

い道に我あよ徳あつ年ヤ十竹りは法ぎの絶小並京美
流書長言そ子ゆあち氏長建武自和の御酌ふた
流くちるを舞を動さうやらるるの所花さるり等
持院敬意所高家山徳氏司由秋を信まをのたひ
流を月あつしそ奥さきゆりしりらるるあま乃

正統ふりらぬ殊よ遠らあや海前も持長此道は達一奥
義をきわむ

絵

そ後世とをわけて討れとあやめれわを言保れ
所代あつこいあなこいあなこいあなこいあなこいあ
ら馬の咄とて客使徳あなまきし
教命ありそらそらそら家のぬいなくをれ

絵

かど世とありらるる何りさ海も足れ絶をえあれそ
のあつらるるにほいあなこいあなこいあなこいあ

下れ
下れ
下れ

たふひおれど なるんのかいしきるあまふし
しはふのがいさかたのきやくしをてはあへん持易
らうはあまあつろをなんらふむらお長あつれを
あされこの道とてまはるかち

後

らりてあふひのまふは畫よりうまふれあふのふ
ふはあまあつろをなんらふむらお長あつれを
あされこの道とてまはるかち

後

おのまのらりうまふは畫よりうまふれあふのふ
ふはあまあつろをなんらふむらお長あつれを
あされこの道とてまはるかち

有徳廟 予一子也 一子也 一子也 一子也
くのおの師も氣徳をかりしうらまき
あまあつろをなんらふむらお長あつれを
あされこの道とてまはるかち

下れ一首の
一通紅筆の

追記

文の中よりなるれどもありあやめさ又みづくの流靴又こ
うの里あしうらりゆきうあ又考のわさう花よ
あしあやめさ又名をあきうけき系繼又郡とる
卯月又玉うげう荒山これの初宿乃華飾也
公よ敵せんと欲する公軍の記述もあは乃浮華乃
河を月々の 謹懐あきあくよ夢也文を能字よ半也
男ハ男の文初あり女ハ女の文初ありこころうけを
女のみ初のことなるあかりはあさあ紀の中女の文
初もあさうけり

安永四年己未六月十九日

伊藤貞丈借用字云

拾遺卷三

徳川全所良具

Blank page with faint vertical lines and some minor stains.

Blank page with faint blue and red markings, possibly bleed-through from the reverse side.

